学内研究組織成果報告（2022 年度）

自己の効果的・肯定的変化を促すインテリアデザイン手法の構築

Method Development of Interior Design to Encourage Occupants
to Make Effective and Positive Changes

松田　奈緒子（MATSUDA Naoko）

本研究は、住み手が行う「空間の自己化」を手掛かりとして、インテリア空間のデザインをサポートする手法の構築を目指す。

「空間の自己化」とは、住み手がそこに住み始めたときから、自分の生活や感性に相応しい個別の空間に仕立て上げることをいう。この過程でインテリア空間には自己が投影され、逆に、自己化されたインテリア空間に自己は影響されることがわかっている（松田・加藤 2014）。したがって、インテリア空間をある意思・意図をもってデザインすることにより、自己の効果的・肯定的変化を促すことが可能と考える。

本研究では、約 15～20 年を経た自己の変容とインテリア空間の変化を、追跡調査によって明らかにすることを目的とする。

本年度は、①約 15～20 年前の調査対象者を対象とした実態調査、②背景にある時代の影響の分析の 2 つを行った。①について、現在は東京都、広島県、富山県に住む計 7 名を対象に写真投影法を用いた実態調査を実施した。また、昨年度にコンタクトを取ることができた NPO 団体の主催者を通じて、約 15 年前に精神に病みを持つ若者を対象にした調査の対象者、1 名に写真投影法を用いた実態調査を行った。

②については、この時代の特徴が色濃く表れていると考えられる 1990 年前後に放送されたトレンディドラマを対象に、そこに描かれたインテリア空間の特徴を明らかにすることを目的とした。11 作品を通覧し，登場する居住空間 27 戸に描かれるインテリア要素 48 項目を抽出し，よく使用されていた要素，ほとんど使用されていなかった要素，前期・後期で異なっていた要素を明らかにした。その上で，11 作品中 9 作品を担当した美術セットデザイナーにインタビューを行った。インテリア要素の取捨選択には 6 つの狙い・理由があること、さらにこれらは、視聴者の願望に沿う（戦略）、視聴者の生活実態に合わせる（世相適応）、撮影の邪魔になるものを省く（対症）の群に分類できることを見出した。現実に願望を織り込んだ手法が、当時のとくに若い視聴者を惹きつけ，インテリア空間への関心を高める一つの契機になったことを確かめた。なお、本研究成果は、「トレンディドラマに描かれたインテリア空間とその背景」（日本インテリア学会論文報告集 33 号、pp.7-15、2023 年 3 月）にとりまとめている。

さらに、国による生活文化・習俗の違いが空間の自己化に及ぼす影響の検討資料を得るため、「中国の住まいと暮らしに関するウェブアンケート調査」を実施した。2020 年度に日本で実施したウェブアンケートの質問項目を共通化し、日中比較を行った。将来的には調査対象国をさらに広げ、知見の国際化・一般化を目指している。